

をもつと報告されてきたが、*A. pulchellum* ならびに *A. caudigerum* var. *cardiophyllum* は  $2n=24$  で、その核型は沖縄等に生育する *A. leptophyllum* に類似していた。また、*A. caudigerellum* は  $2n=26$  の染色体数であるが、その核型はほとんど次端部型染色体からなり、日本や北米の同群の種とは著しく異なっていた。一方、狭義のカンアオイ群 (*Heterotropa*) の各種は、これまでその基本数がすべて  $x=12$  であると報告されてきたが、中国産の2種、*A. maekawae* ( $2n=26$ ) と *A. delavayi* ( $2n=39$ ) は  $x=13$  であり、その核型は北米東部のアメリカカンアオイ群 (*Hexastylis*) や東アジアのウスバサイシン群 (*Asiasarum*) に似ていることが明らかとなった。

○東京湾沿岸に帰化したユメノシマガヤツリ (新称) について (浅井康宏・小山鐵夫) Yasuhiro ASAI & Tetsuo KOYAMA: *Mariscus congestus* (Cyperaceae) as a new adventive to Tokyo Bay

東京湾沿岸の埋立地である通称“夢の島”一帯には、市街地からの種々な廃棄集積物などに由来するもののほか、東京港へ入航する国外からの船舶に随伴して侵入する多種多様の外来植物が散見される (江東区の野草, 1984)。ところで筆者の1人浅井は、この数年にわたり本地域の帰化植物を調査、同定する機会を得、多くの関係者諸氏から提供された貴重な標本 (資料) および現地での実地踏査の際に得た生品をもとに、鋭意検討を行ってきた。その間において、該地域にかなり大形のキャツリグサ科の一種が生育していることに気づき、小山と共同で検討を進めた結果、我国への新しい帰化植物 *Mariscus congestus* (Vahl) C.B. Clarke であることが判明したので、ユメノシマガヤツリと新称し、報告しておくこととした。

その概形を記せば、次のようなものである。

多年草で短い根茎があり、疎に叢生する。稈は高さ 30-70 m、硬く、平滑、基部はやや肥厚する。葉は線形で幅 4-6 mm、稈より少し短く、先は尖り、基部の鞘は紫褐色を帯びる。葉状苞は 3-4 (-6) 個、下方の1-3個は長く、花序の3-5倍長に及ぶ。繖形花序は単純または一部やや複生、繖梗は2-7個、斜上、(1-)5-12 cm、平滑である。各梗の先端に球状、径 2-3 cm で稍密な花穂を1個着けるが、大形の花穂では、その基部に略無梗で小形の側穂を着けて複生状となる。小苞は鬆状、長さは 1-4 cm である。小穂は短い穂軸上に殆んど放射状に着き、幅狭い披針形、先は尖り、長さは 1-2 cm、幅は 1.5-2 mm、圧扁の四角柱状で赤褐色または多少血赤色を帯び、稍密に 7-16 花を生じる。小穂の基部に関節がある。小軸には幅狭い翼があり、稍左右に屈曲する。穎は略立ち、心もち疎着、長橢円形で先は尖り、長さは 3-4 mm、7-9本の脈があり、辺縁は薄膜質で芒はない。瘦果は長倒卵形、三稜があり、長さは  $1-1\frac{1}{2}$  mm、熟して黒っぽい。花柱は

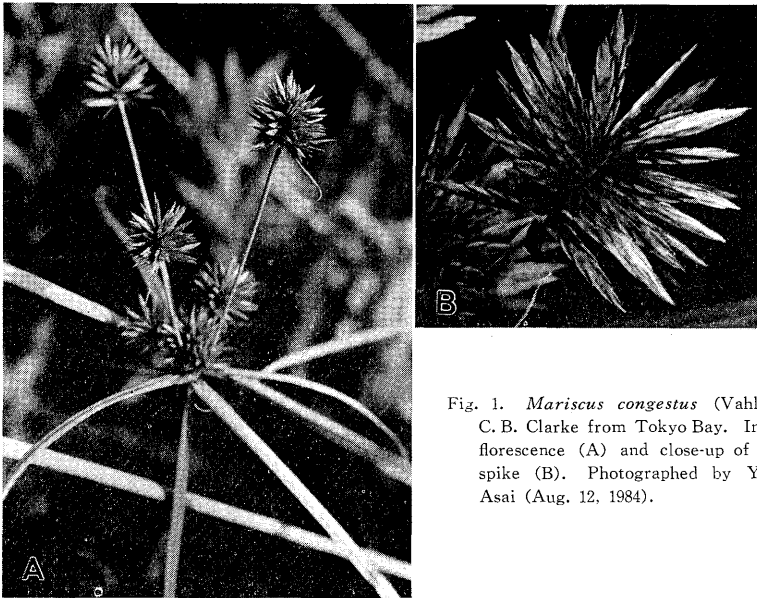


Fig. 1. *Mariscus congestus* (Vahl)  
C. B. Clarke from Tokyo Bay. In-  
florescence (A) and close-up of a  
spike (B). Photographed by Y.  
Asai (Aug. 12, 1984).

長く、先端3岐。雄蕊は3本である。

以上のものはイヌグ属の一種で、アフリカ南部の南ア連邦やバストランド、セントヘレナ諸島さらにオーストラリアの略全域に分布している。日本へは恐らくオーストラリアまたは南アフリカから入ったものであろうが、中部ヨーロッパのドナウ河流域にも帰化している。本来は砂地の湿地を好むが、海岸や半乾燥地にも生える生活力の旺盛なカヤツリグサの一種である。

因みに我国のイヌグ *M. sumatrensis* (Retz.) T. Koyama は、穂が円柱形であるのに対し、本種の穂は球状 (Fig. 1, A) である。また小穂はイガガヤツリ *Pycneus polystachyos* (Rottb.) P. Beauv. のように、左右から扁平であるので明瞭に区別できる。いずれにしても本種に極めて近縁のものを、我国のフロラ中には見出すことが出来ない。

ところで現在、本種は東京湾に面した埋立地一帯の向陽の水湿荒蕪地などに完全に帰化し、極めて旺盛な生育を示している。恐らく東京港に入航した船舶の積荷か輸入材 (俗に深川の貯木場で原木とか丸太と呼ばれているもの) などに附着し、種子が持込まれたものと考えられる。今後、東京湾を中心とした沿岸附近に、漸次分布域を広げて行くものと思われるが、しかし精査したならば既に各地に生育している可能性がある。同学諸氏の注意を望みたい。

なお渡辺瞭氏の採集された標本などを拝見すると、その侵入はかなり古いものと推測される。恐らく現在までメリケンガヤツリなどの他の既知帰化種と混同され、見すごされて来たものであろう。ちなみに本種の和名としては最初、原産地にもとずいてゴウシュウ(豪洲)ガヤツリなる名も考えたが、その後表記のものがより一般に親しみやすいことから、標準和名としてこれを提唱することにした。いずれにしても、また新たな invader が確実に我国の帰化植物フロラに加ったことになる。

終りに、本稿をまとめるに当り資料や生育地の調査に際し種々ご援助下さった渡辺ヨシノ氏、ならびに長年にわたり本地域の植物調査に取組まれ、本植物検出の端緒を開かれた渡辺瞭氏に対し、敬意と感謝の意を表する次第である。

*Mariscus congestus* (Vahl) C.B. Clarke in Dur. & Schinz, Consp. Fl. Afr. 5: 553, 1895, and in Thiselt.-Dyer, Fl. Cap. 7: 191, 1897; Domin, Bibl. Bot. 35: 72, 1897.—*Cyperus congestus* Vahl, Enum. Pl. 2: 358, 1805; Bentham, Fl. Austral. 7: 280, 1878; Moore, Handb. Fl. N.S.W. 449, 1893; Kükenthal in Engl. & Diels, Pflanzenr. 4(20): 101 Heft: 444, 1936, Not of Poirét, 1806.

Nom. Jap.: Yumenoshima-gayatsuri (T. Koyama & Y. Asai, nov.)

Hab. Honshu: On sunny wet grassy ground of Yumenoshima, Koto-ku, Tokyo (A. Watanabe, Jul. 29, 1982, NY, auct. herb.); eadem loco (Y. Asai, Aug. 12, 1984, TI).

*Mariscus congestus* (Vahl) C.B. Clarke, a native of South Africa and Australia, has recently been found naturalized in large, quickly expanding associations on reclaimed lands named Yumenoshima in Tokyo Bay. Assumingly this sedge had already arrived at Tokyo Bay area some time ago together with imported timbers and ship cargo, but it has not been correctly identified till today. In this meantime this new adventive has been well established in Yumenoshima Reclaimed Islands, and is steadily extending along the sea coast.

(東京歯科大学・ニューヨーク植物園)

---

□法政大学フォン・シーボルト研究会(編): **Ph. Fr. von Siebold 研究論集** 301pp. 1985. シーボルトに関する研究論文6篇を収録したもの。研究会は1980年5月に発足し、ライデンにおける資料を収集し、その成果は「シーボルト研究」第1号、第2号にすでに発表されているが、今回の論集には大森実氏の「伊藤圭介からシーボルトに贈られた腊葉標本について」(II) p. 37-91 およびその「史料」 p. 209-223 を含み、伊藤圭介とシーボルトの植物を通じての交流が具体的に示されている。

(木村陽二郎)